

35

曲直瀬道三『薬性能毒』と
杏雨書屋所蔵『救急本草』に関する研究鈴木 達彦^{1,2)}, 鈴木美津穂¹⁾, 並木 隆雄²⁾¹⁾ 帝京平成大学薬学部, ²⁾ 千葉大学大学院医学研究院和漢診療学

曲直瀬道三の『薬性能毒』には写本、刊本を合わせて種々の資料が残されている。「能毒」という用語は、直接的には道三の師である田代三喜の『当流能毒集』からとられたとみられる。演者らは内藤記念くすり博物館所蔵『当流能毒集』(T0293)が特殊な作字により生薬名が表記された田代三喜の能毒書であることを見出している。『当流能毒集』の異本には『三婦廻翁医書』中の「薬の部」のほか、杏雨書屋所蔵の『能毒集新撰之方』(乾 1801)がある。曲直瀬道三は田代三喜の能毒書を部分的に採用するも、形式、内容を新たに自身の能毒書を編纂したとみられる。

曲直瀬道三の能毒書のうち、比較的初期に成立したとみられるものに『薬性能毒』がある。『薬性能毒』の系列にある写本は、香附子から生薬を列記する。大きく分けて2系統あり、1つは漢文体を基本として記載されるもので、京都大学富士川文庫所蔵『薬性能毒』(イ/216)、杏雨書屋所蔵『薬性能毒』(乾 5329)がある。もう1つは漢文体に仮名まじりの記載があるもので、龍谷大学図書館所蔵『能毒』(690.9/431-W)、京都大学富士川文庫所蔵『能毒全并追加』(ノ/5)があり、なかでも内藤記念くすり博物館所蔵『能毒全部』(44365)は、ほとんどの記載で読み下されている。以上の漢文体と、仮名まじりの両者の記載される内容は近似する。

『薬性能毒』の成立時期に関しては、杏雨書屋に注目すべき資料が所蔵される。『救急本草』(杏 1838)は書名には「能毒」を含まないが、前半部を欠いた『薬性能毒』とみられる。おそらくは前半部がないために、仮に書名がつけられたのであろう。本書は漢文体の系統の『薬性能毒』であるが、巻末に「天文十八巳酉(1549年)十一月至日雖知苦齊主道三記之」とあり、以上までに挙げた『薬性能毒』のなかで最も古い年記があり、『薬性能毒』は曲直瀬道三の初期の能毒書と考えられる。『薬性能毒』は跋に「天正八年庚申十月六日夜畢 盍静翁道三」とある版本が刊行されるが、版本も香附子から収載し、漢文体の系統を踏襲して内容を追加して成立したと考えられる。

曲直瀬道三の『薬性能毒』と田代三喜の『当流能毒集』を比較すると、『当流能毒集』は生薬の表記が三喜独自の作字によってなされているが、『薬性能毒』は一般的な生薬名は少ないものの、本草書にあるような異名から採った一字薬銘でなされている。また、『当流能毒集』は1つの生薬について、気味、薬能、毒(配合禁忌を含む)の3つの項目で記載されているが、『薬性能毒』は薬能と毒の2つの項目で記載される。形式についても『当流能毒集』は、気味を赤字で書き、毒の冒頭には「不」の文字を書くが、『薬性能毒』では毒の項目を赤字で書く。『当流能毒集』に比べて『薬性能毒』は気味について記載する項目は見られない。しかしながら、仮名まじり、漢文体を問わず、両者の系統には記号によってその生薬の気味を表記しているとみられる資料がある。一字薬銘で記された生薬名の四隅、または中央に色分けした点を打つ。資料によっては、色分けではなく黒点、または白抜きした丸を打つ。これらの点が四隅、あるいは中央のうち、どの位置に点が打たれているかによって、生薬の酸甘苦辛鹹の五味や、寒熱などの気味を表しているとみられる。

田代三喜の『当流能毒集』では生薬の効能から作字をつくり、表記する文字自体に意味を持たせて生薬の運用に役立てたと考えられる。曲直瀬道三は三喜独特の作字は採用しなかったが、生薬の表記に薬能の一端である気味について視覚的な情報を加えており、薬能、毒の項目をつくって記載するのも含めて、田代三喜の影響を受けているとみなせる。点を打つことによる気味の表記は、刊行されたものでは文章化されているなどして見られない。

本研究はJSPS 科研費 15K21345 の助成を受けたものです。